

2024年 第16回
信長の台所歴史検定
「津島の達人」直前講座

制作

信長の台所歴史検定「津島の達人」実行委員会

津島市の紹介

津島市は愛知県の西部、名古屋市の西方約16kmに位置し、昭和22年3月、県下9番目の市として誕生しました。

- 位置：東経136度44分29秒
北緯35度10分37秒
- 大きさ：東西 7.30キロメートル
南北 7.25キロメートル
- 面積：25.09平方キロメートル 平成27年3月6日
- 総人口：60,152人 世帯数：27,235世帯 令和5年12月1日

市の木：クロマツ
市の花：藤
市の鳥：シラサギ

市の公式キャラクター

つし丸
ふじか
マッキー

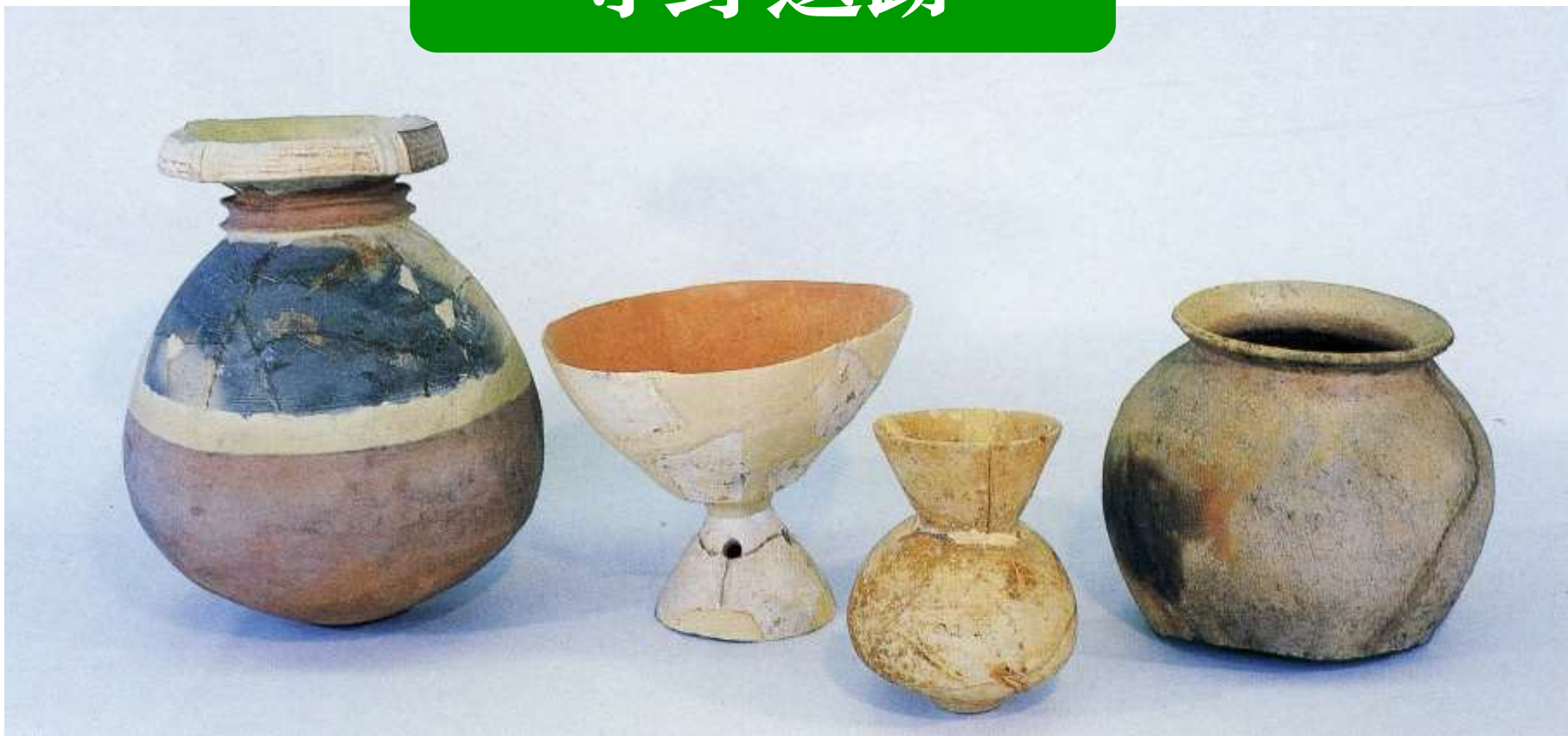


津島市民歌【作詞：杉山 秋津 作曲：宇佐美 章】

- 一. むらさき匂う 朝ぐもに 天王川の 水清し ほおえむ花と 競いつつ
明日への扉 いまひらく 希望の街よ わが津島
- 二. 宮の名高く 幸満ちて 市民の心 ひとすじに 平和と愛の 炬をかざし
久遠の行手 仰ぎゆく 栄えある街よ わが津島
- 三. 波打ついらか 陽に映えて みどりの風は 夢を生む 進みてやまぬ なりわいの
息吹と虹を噴き上げつ 伸びゆく街よ わが津島

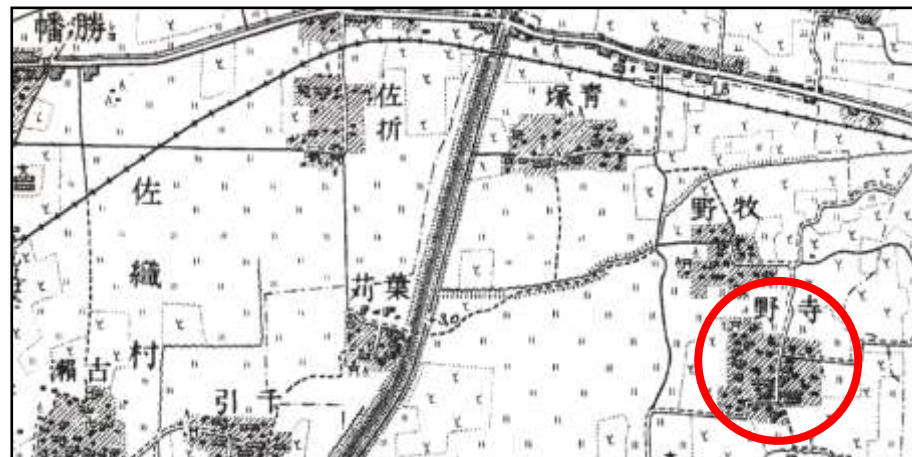
津島の歴史文化

寺野遺跡



- 昭和39年、寺野町20haの耕地整理工事するとき、地下から井戸構造物と弥生中・後期の各種土器・パレススタイルの丹彩土器が出土し、2000年ほど前の弥生時代に集落が営まれていた遺跡であることが判明しました。他に白鳳期の軒丸瓦なども出土し、古代寺院が存在しました。

明安寺 津島市寺野町字郷76番地



寺野では、7世紀後半の白鳳時代の法隆寺式
鍍瓦も出土し、明安寺には平安時代の「木造
仏頭」が所蔵されています。仏頭は大日如来
像の頭部とされ、県指定文化財。尾張仏教黎
明期に、寺野の地に大寺院があったと考えら
れます。

津島の古代史料

「飛鳥京跡苑池遺構第4次調査」

「津嶋」と記された木簡を発掘

ほいんのとしじゅうにがつ おわりあまごおりつしまのさと

(表) 戊寅年十二月尾張海評津嶋五十戸

からひとべたね しょう (つき) あかごめ とかきぬかたべきん

(裏) 韓人部田根 春赤米斗加支各田部金

- ・「戊寅（つちのえとら）年」は天武7年（678）
- ・「尾張海評」は「おわりあまごおり」
- ・「評」は大宝元年（701）施行の大宝令施行以前の地方行政組織名です。

この木簡により、大化の改新（645）・壬申の乱（672）を経て、古代国家が成立した7世紀末に、津嶋五十戸（つしまのさと）が存在し、1,000人ほどの人々が居住していたことが分かります。



尾張国馬津駅

『延喜式』卷28兵部省

(延長5年(927)撰進)

・尾張国の駅伝馬

馬津・新溝・両村 各十疋

伝馬 海部郡・愛智郡 各五疋

馬津(まつ・うまつ)駅

比定地：津島市北町周辺

新溝(にいみぞ)駅

比定地：名古屋市中川区露橋町

両村(ふたむら)駅

比定地：豊明市沓掛町上高根

『尾張国郡司百姓等解文』

永延2年(988)

- ・馬津の渡に船無きに依り、所部の小船並びに津の辺の人を以て渡し煩わしむるの事…
- ・馬津の渡は是れ海道第一の難処にして、官使上下の留連する処也、…

馬津、津島の「津」は、舟着き場、湊の意味です。

『延喜式』式内社 海部郡：8座並小

- 國玉神社（くにたま）
名古屋市 中川区 富田町 大字 弓場字 御内中 1131
- 漆部神社（ぬりべ）
あま市（甚目寺町字東門前11）
- 藤嶋神社（ふじしま）
あま市（七宝町大字秋竹字柏田509）
- 憶感神社（おっかん）
津島市 神守町 字 上町 69
- 諸鍬神社（もろくは）
愛西市（佐織町大字諸桑字竹越490）
- 宇太志神社（うたし）
愛西市（八開村大字鶉多須字下中山27）
- 由乃伎神社（ゆのき）
愛西市（佐屋町大字柚木字東田面773）
- 伊久波神社（いくは）
稲沢市（平和町大字下三宅御内419）



諸鍬神社



由乃伎神社



憶感神社

津島の良王伝承



大龍寺



良王神社

室町時代前期の津島に関する古書として『浪合記』と『信濃宮伝』があります。文化7年（1810）の写本が大龍寺（津島市北町）に現存しています。長享2年（1488）に著された『浪合記』は、後醍醐天皇-宗良親王-尹良親王とその嫡子である良王君の生涯についての物語で、津島四家七名字と呼ばれる人々が良王君を守って津島へお連れしたと書かれています。

十五党は津島四家の大橋・岡本・山川・恒川と七名字の堀田・平野・服部・鈴木・真野・光賀・河村と宇佐美・開田・野々村・宇都宮です。

大龍寺は尹良親王の菩提寺、瑞泉寺は良王君の菩提寺。

津島神社の若宮社の祭神は尹良親王、良王神社は米之座町にある。

室町後期の津島

『海道記』より約300年後の大永6年(1526)3月の『宗長手記』には津島のこと記されています。宗長(1448~1532)は連歌師です。『宗長手記』は清須の次に津島の町を記しています。

『同じ尾張国の津島へ到着した。旅宿は津島の正覚院(現、不動院)である。この地方の領主織田弾正忠の息子の信秀がこの度の礼を述べに会いに来、書状もあった。その夜は正覚院で連歌を興行した。堤に沿って建ち並んでいる家々が川岸に群生している葦の間から見える。この津島の地は堤の上に家並みがある。川には長さ約三町の橋(天王橋)がかかっている。瀬田の長橋よりも随分長い。および(及川)墨俣川(古木曾川)が合流しているので、近江の琵琶湖のようである』(現代語訳)

不動院

(津島市良王町2 - 15)

『宗長手記』には「同じ国津島へ立ち寄った。旅宿はこの所の正覚院である。領主の織田霜台(そうたい)の息子の三郎が礼に来た。書状などがあつた。宿坊で連歌の興行をした。」(現代語訳)



宗長の旅宿となった正覚院は現在の不動院のことです。三郎こと信秀も加わって、連歌の興行を行っていることから、勝幡城主であった織田弾正忠(だんじょうのじょう)家にとって、**正覚院は津島の迎賓館的な宿坊であったことが分かります。**不動院は真言宗寺院で、尾張の古刹の一つです。

尾張国 織田氏

守護

斯波氏

守護代

清須織田氏 岩倉織田氏

重臣

清須三奉行

清須織田氏（大和守家）と岩倉織田氏（伊勢守家）に分かれたのは織田敏定と織田敏広の代の和約（1479年）に基づく。当初は嫡流であった岩倉織田氏の方が優勢でした。清須織田氏が尾張の下四郡（愛知・知多・海西・海東）を治め、岩倉織田氏が尾張の上四郡（春日井・丹羽・葉栗・中島）を治めました。

斯波氏は戦国時代に入ると主要領国である越前を家臣の朝倉氏に奪われるなど衰退の兆しを見せますが、それでも尾張・遠江の東海2ヶ国を支配する守護大名でした。

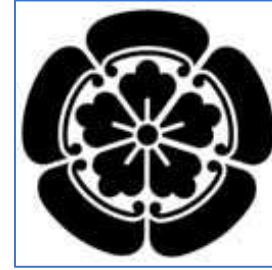
守護代の織田氏の出身は越前国織田荘の劔神社の神官で、管領の斯波武衛家の家臣となります。応仁の乱における斯波氏の内紛による混乱のため、守護代織田家は分裂。それぞれが主家の斯波氏を凌ぎ戦国大名化。



織田弾正忠家と信長



尾張下四郡を支配する「織田大和守家」の清須三奉行家の一つ「弾正忠（だんじょうのじょう）家」と称していました。この弾正忠家の織田信定（のぶさだ、信貞）が勝幡に城を築き、経済的に繁栄していた津島湊（津島五ヶ村）を支配下におき勢力を伸長させます。



織田家の家紋は津島神社と同じ木瓜紋。旗印は永楽通宝。

織田信秀を父とする信長の幼名は吉法師。幼少から奇妙な行動が多く、周囲から「大うつけ」と呼ばれました。美濃の斉藤道三の娘・帰蝶（濃姫）と結婚。天下布武を掲げ、既存の権威や勢力の否定、新兵器鉄砲の採用などを通して、戦国時代を終結に導きました。

信長、津島で踊る



『信長公記』の首巻、弘治三年(1557)七月十八日おどりを御張行。上総介どのは天人の御仕立に御成り候て、小鼓を遊ばし、女おどりをなされ候。津嶋にては堀田道空庭にて一おどり遊ばしそれより清洲へ御帰りなり。津嶋五ヶ村の年寄共おどりの返しを仕候。…清須へまいり候。御前へめし寄せられ、是はひようげたり。又は似相ひたりなどなど、それぞれあひあひとしほらしく、一々御詞懸けられ、御団にて冥加なくあをがせられ、御茶を給候へと下され、忝き次第、炎天の辛勞を忘れ、有難く皆感涙をながし罷帰り候哉』

津島大橋家

尾張国津島は、「四家七名字」の十一党が支配しており、四家筆頭の大橋家は、津島の有力な土豪であり、定高の時に奴野城（現在の西方寺付近）を築いたと伝えられています。戦国初期の当主の大橋重一は大永2年（1522）、美濃国高須城を築造しています。

大橋重長（1565年没）は信秀の娘「くらの方」を正室に迎えて信秀・信長に仕えました。重長には織田信弼（のぶかず）が生まれており、織田家の御連枝衆として重用されましたが、本能寺の変で戦死しました。織田信長と縁戚にあたった大橋氏は、本能寺の変の後、秀吉には仕えようとせず、冷遇されたと伝えられます。その中で大橋重賢（しげかた）は福島正則に仕えました。正則が広島で改易となり、重賢は出雲国松平直政に仕え、家老職を勤めました。

津島衆 服部小平太（一忠、1527?~1595）



天文23年(1554)に清洲城に入った信長は、4年後に岩倉の織田信賢を討ち、尾張を統一。永禄3年(1560)に桶狭間の戦いで今川義元を奇襲し勝利、永禄10年(1567)美濃の斉藤龍興を滅ぼします。

信長は居城を岐阜に移し、天下布武の道を昇り始めます。

「桶狭間の戦い」で、敵将・今川義元に一番槍を突けたのが津島の服部小平太です。父は猪武者と呼ばれた服部平左衛門。小平太は、信長亡き後は、秀吉の黄母衣衆として仕え、諸戦で功をあげます。

「桶狭間の戦い」で活躍した服部一忠は、信長の死後は再び馬廻として豊臣秀吉に仕えて黄母衣衆の一員となり、天正13年(1585)に従五位下采女正の官位に叙せられました。天正19年(1591)に小田原征伐の戦功により、松阪城主に抜擢されて伊勢国一志郡に3万5000石を与えられます。ついに、服部小平太は津島衆で初めて大名になったのです。

松阪城



しかし、豊臣秀吉の甥・秀次の奉行を務めたことから、小平太の人生が暗転します。文禄4年(1595)、服部一忠は豊臣秀次事件に連座させられ、秀吉より叱責され自害させられました。

小瀬甫庵『太閤記』には、「一、服部采女正 越後宰相 一、同妻子 吉田清右衛門尉」と記されています。妻子も捕らわれて殺されたのです。



雲居寺（北町32） 雲居寺の宗派は曹洞宗です。津島四家七名字の一家である服部伊賀守宗純が永享12年（1440）に創建したと伝えられます。子孫服部小平太は織田信長に仕え、桶狭間の合戦で今川義元に一番槍をつけた人物です。彩色豊かな五百羅漢が安置されています。

永禄4年(1561)5月 西美濃森部の合戦

森辺合戦の事

五月十三日、木曾川・飛騨川の大川 舟渡し 三つこさせられ、西美濃へ御働き。… 翌日十四日、雨降り候といえども、御敵、洲の俣より 長井甲斐守・日比野下野守 大将として、森辺口へ人数を出だし候。

信長 天ノ与フル所 の由、御諚候てにれまたの川を越しかけ向はせられ、合戦に取むすび、鎗を打ち合わせ、数刻相戦い、鎗下にて 長井甲斐守・日比野下野 初めとして、百七十余人討たせられ …

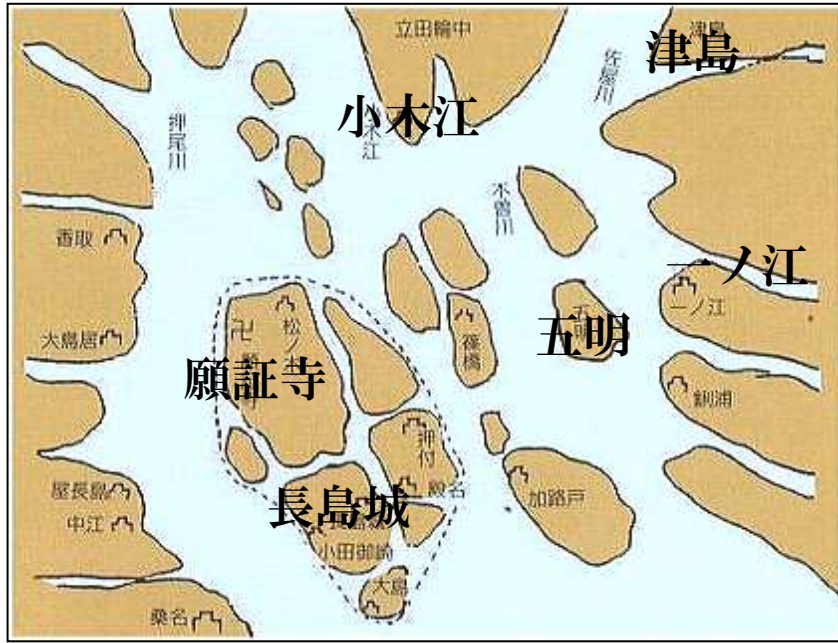
長井甲斐守 津嶋の服部平左衛門 討ち取る。

日比野下野守 津嶋恒河久蔵 討ち取る。

神戸将監 津嶋河村久五郎 討ち取る。

頸 2つ 前田又左衛門 討ち取る

長島一向一揆



長島を舞台にした合戦で著名なものは、元亀元年（1570）に起こった長島一向一揆です。織田信長に対抗していた石山本願寺の法主顕如の命に応じて門徒衆が蜂起しました。願証寺側は元亀元年11月、一向一揆を扇動して小木江城を襲いました。この門徒らによる猛攻に城を支えきれなくなった信長の弟信興（彦七郎）は11月21日に自刃、小木江城は落城しました。

信長は元亀元年（1570）と天正元年(1573)の2度の長島攻めに敗退します。3度目の天正2年（1574）7月、信長は嫡男 信忠とともに、7万の大軍でもって、長島攻めを行いました。長島願証寺（がんしょうじ）を殲滅しようと津島に陣を構え、東方から長島を攻める信忠隊、木曾川筋を南下する信長本隊、川の西側を南下する佐久間隊と手分けして攻撃しました。次々と砦を落としていき、徹底した長島攻めを展開しました。

津島出身の平野家(奈良県田原本町)

賤ヶ岳の七本槍

- 福島正則: 広島藩49万石 ⇒ 改易
- 加藤清正: 熊本藩52万石 ⇒ 改易
- 加藤嘉明: 会津藩40万石 ⇒ 改易
- 片桐且元: 大和国竜田で1.8万石 ⇒ 切腹
- 糟屋武則: 播磨国加古川1.1万石 ⇒ 改易
- 脇坂安治: 伊予国大洲に5.3万石 大名存続

安治の嫡男安元には実子(安経、安利ら)がいたにもかかわらず、当時将軍家光の信任が厚い堀田正盛の次男である安政を養子とする。

- **平野権平(津島): 大和国田原本で5千石。**

七本槍の中で唯一大名になれなかったが、子孫は九代続いて明治まで存続した。幕末に1万石

津島五ヶ村

米之座・堤下・筏場・今市場・下構



一村あたり数百mです。この五ヶ村から5艘の豪華な車楽舟を出すのですから、戦国・江戸時代、津島の富の集積は驚くばかりです。

津島五ヶ村とは、米之座・堤下・筏場・今市場・下構の自治連合体で、戦国時代は自治組織「惣(そう)」でした。

北方の米之座から南の下構まで1km足らずで、その間に五ヶ村があります。旧街道すなわち現在の本町筋の道路を挟んだ両側の街並みです。

木曾川治水 御囲堤



慶長13年（1608）に、木曾川の尾張側に御囲堤が完成します。御囲堤は、名の通り尾張平野を木曾川左岸沿いにぐるりと囲む堤防です。愛知県犬山市から弥富市までの木曾川左岸48 kmにもおよぶ大堤防です。我が国の治水史上特筆すべき連続堤といわれています。御囲堤の堤防上部（馬踏（ばふみ））は10.9m～18.2mあり、高さは9.1m～14.5m、堤防の底部（敷）は馬踏の2倍以上もありました。

家康にとって「御囲堤」の意図は、治水の他にもありました。それは木曾山中の木材運搬川路の確保と西国大名に対する強固な防衛線としての役割でした。

佐屋街道と佐屋宿



佐屋街道(津島下街道)は東海道の熱田と桑名を結ぶ「七里の渡し」の脇街道。正保4年(1647)に宮宿(熱田)から、岩塚、万場、神守、佐屋に宿場が置かれ、岩塚と万場間は庄内川の船渡しです。寛文6年(1666)、幕府道中奉行の管轄下となりました。神守から佐屋への途中の埋田に追分があり、佐屋と津島とに分岐。佐屋から桑名までは、木曾川を使った「三里の渡し」でした。熱田から佐屋までは陸路六里でした。佐屋宿には本陣2軒、脇本陣2軒、旅籠31軒がありました。

一里塚 (神守町下町)



佐屋路の神守宿一里塚は江戸日本橋から93里(約365km)です。道路の北側にある塚は東西7.3m、南北6.7m、高さ1.5mの小山で、**棕**の木(津島市保存樹)が植えられています。

名産「越津慈葱」(こしづねぶか)」

- 越津ねぶか(ネギ)は、『小治田之真清水』(江戸後期の、地誌本)で、紹介されています。

「神守村・高台寺村・越津村などで生産し、その茎は肥えて白く柔らかであり、美味しいことは江戸で有名な岩槻ねぎに優るとも劣らない。中世から越津ねぶかなどと称して名産品として販売されている。この味は他産に優っている」(現代語訳)と賞賛されています。



日光川



日光川上流は、古くは「**萩原川**」「**足立川**」とも呼ばれ、木曾八流のひとつでした。江戸初期までは大野山新田・草平新田を通り、町方新田で**三宅川**と合流し、現在の新堀川の流路で**津島川(天王川)**を通り、津島高校辺で**佐屋川**に合流。

天明4年(1785)の尾張藩による河川改修によって、現在の三川合流点(領内川、三宅川合流点)あたりで、**津島川から旧日光川へ川筋を変える大規模な掘り割り工事が始められ**、ほぼ現在の河川形状が築かれました。曲がりくねった日光川下流部はこの工事によって直線的な流路になりました。

現在の日光川

現在の日光川は江南市に源を発し、尾張平野の西部を南に流れ伊勢湾に注ぐ流路延長約41kmの二級河川です。

日光川は流域の約半分が海面よりも低い、「海拔ゼロメートル地帯」が広がっています。日光川の中下流、蟹江川、福田川等は典型的な天井川(河床より周辺地盤の方が低い)です。日光川の場合、干潮時付近では河川水位より外潮位が低くなる事が多いため、河川水は自然排水することができます。しかし、満潮時付近では河川水位より外潮位が高くなる事が多いため、水閘門を閉じて海水の逆流を防いでいます。水閘門を閉じた際に、台風などの豪雨に襲われますと、川の水位が上昇し、堤防から雨水が溢れるような危険な状況になるので、日光川では河口部に排水機場を設置し、伊勢湾に強制的に排除します。

津島市の沿革（津島村から津島市）

- 明治11年(1878)12月に津島村は又吉新田と合併しました。
- 明治22年に町政施行により、津島村・向島村・中地村と旧日光新田村分で海東郡津島町となりました。神守地域では、神守村(明治11年 南神守村・北神守村が合併)の他に百高村・益和村・越治村・野間村が成立。神島田地域では、唐臼村・鹿伏兎村・半右衛門新田・頭長村・中一色村が合併して神島田村になりました。
- 明治39年(1906)7月1日に神守・百高・益和・越治・野間の5ヶ村が合併し、神守村となりました。神島田村・大井村・千秋村の3ヶ村が合同し永和村が誕生。
- 昭和22年(1947)3月に津島町から津島市へと市政を施行しました。愛知県では9番目の市として市制施行しました。
- 昭和30年(1955)1月に津島市は神守村と合併(編入)しました。
- 昭和31年4月に津島市は永和村の旧神島田地区と合併(編入)しました。

濃尾大震災（濃尾地震）

- 明治24年（1891）10月28日午前6時37分、岐阜県美濃地方、愛知県尾張地方を突然猛烈な地震が襲いました。最初は上下、水平方向への動きとともに、北、南へ揺れていましたが、いきなり大きな烈震となりました。31日までの4日間に、烈震4回、強震40回、弱震660回、微震1回、鳴動15回、合計720回を数えました。
- 震源地は本巣郡根尾谷（岐阜県本巣市根尾）。地震のエネルギーはM8.0、世界最大級の内陸直下型地震。地震の及んだ範囲は、西は九州全土に、東は東北地方。激震地域は岐阜県的美濃を中心に、愛知県尾張地方、滋賀県東部、福井県南部に及びました。
- 津島の被害も甚大で、津島町の寺院26ヶ寺のうち24ヶ寺は倒壊し、小学校は3校とも倒れました。津島の死者は68名、負傷者264名、全戸数2,700戸の内、全壊934戸・半壊1,517戸でした。

アメリカ移民、感恩報国碑

津島神社 南大鳥居

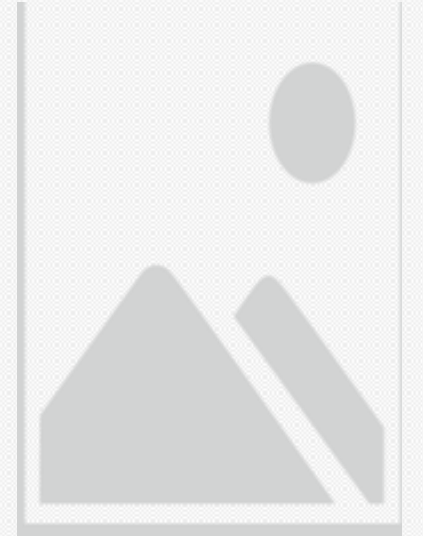


明治14年（1881）、愛西市二子町出身の山田芳男は出漁中に難破しましたが、アメリカ船に助けられてカリフォルニアに渡ります。山田芳男は農園で働いた後、帰国し、親類の縁者をつのり、数人で再び渡米しました。彼らが、数年後に大金を故郷に送ったことから、明治24年（1891）以降、佐織地区（愛西市）に渡米ブームが起きました。この頃、濃尾大震災（1891年）や鶴多須切れ（1897年）の洪水などの災害や繊維産業の不振により、海部津島地方を経済不況が襲っていました。そのため、佐織・津島・七宝などに渡米ブームが起きました。津島神社南鳥居は、アメリカ移民の有志が1927年（昭和2）に寄進建立したものです。鳥居の西側に「感恩報国」碑が建ち、裏面には300名ほどの寄進者が刻されています。

毛織物の父 片岡春吉 (1872~1924)



毛織物の父と呼ばれた片岡春吉は、52年の生涯を毛織物の品質向上に捧げました。寝食の間も惜しんで研究に没頭し、その研究成果を独占することもなく、尋ねてくる人にはその技術をすべて教えました。そのおかげで、津島も含めた尾張西部地方は毛織物工業地帯として発展していったのです。片岡春吉という人物のお陰で、津島の経済は100年持ったと言っても過言ではないでしょう。昭和11年(1936)に天王川公園に銅像が建立されました。



大正・昭和 毛織物産業の興隆

1914年第一次世界大戦が勃発し、毛織物輸入は途絶えましたが、国産品が愛用され、「時計の振り子が一振りするごとに10円（現在の1万円位）儲かる」ほどの好況でした。動力織機が導入され、撚糸や染色整理の近代化も進み、毛織物工業地帯として急速に発展しました。

第二次世界大戦で毛織物は大きな打撃を受けましたが、戦後の衣料不足、朝鮮戦争（昭和25年）の特需により立ち直り、「ガチャマン景気」（ガチャンと織れば万円のお金が手に入る）と言われる全盛期を迎え、津島の工場には若い女性の集団就職もあり活気にあふれました。昭和40年代まで「ウール（毛織物）の津島」として全国にその名をとどろかせました。



鉄道の歴史 明治

尾西鉄道は、蒸気機関車の煙突から吐き出される火の粉を嫌って、線路の測量に反対されることもありましたが、明治31年(1898)4月に弥富－津島間の営業を開始。その後、津島－森上、森上－萩原(はぎわら)に続き、明治33年1月に萩原－一宮(25.1km)が開通し、経営は順調でした。開通当時の駅は弥富・佐屋・日比野・津島・六輪(ろくわ)・森上・萩原・苅安賀(かりやすか)・新一宮の9つの駅でした。



名古屋電気鉄道は、大正3年(1914)1月に枇杷島と津島を結ぶ「津島線」を開通。大正10年(1921)郊外線を引継ぐ新会社の名古屋鉄道を設立。名古屋鉄道は、大正14年(1925)に尾西鉄道を合併し、尾西鉄道の路線は名鉄尾西線となりました。

デ・レーケ

船頭平閘門



ヨハネス・デ・レーケ
(1842～1913年)
オランダ人技師
「近代砂防の祖」と称され、
治水事業に大きな功績。

明治政府は河川や港湾工事のため、優れた治水工事技術を持っていたオランダから技師団を招きます。ヨハネス・デ・レーケは、明治11年(1878)から木曾三川流域を山から海までじっくりと調べて回り、改修計画を作成しました。明治大改修は、明治20年(1887)着工され第1期から第4期工事完了まで25年を費やして、明治45年(1912)3月に完成します。

改修計画の主な内容

①木曾三川を完全分流する。

木曾・長良背割堤(せわりてい)は、木曾川と長良川を分流するために設けられた延長約12kmの堤防。

②佐屋川を廃川にする。

③船頭平に閘門を設ける。(閘門は、水の高さが違う木曾川と長良川の間を船が行き来できるようにした施設)

船頭平閘門 (愛西市立田町福原)



平成12年(2000)
国指定重要文化財

船が水面の高さの違う川、水路、海などへ進むときは、水門で水を調節し、水面の高さを一定にしなければなりません。この働きをする水門を「閘門」(こうもん)といいます。

船頭平閘門は、明治32年(1899)に着工し、明治35年(1902)3月に竣工しました。閘門の全長は56.3mで、水位調節時に船や筏が滞留する閘室は、当時の船や筏の大きさを考慮して長さ23.9m、幅5.6mです。明治35年(1902)に閘門完成後、大正初年までは年間2万隻以上の船が通りました。材木筏の数も明治年間、年間1万枚を超えていました。

野口米次郎 (ヨネ・ノグチ、1875～1947)

野口米次郎は明治8年(1875)に津島町中島(本町4丁目)で生まれました。明治24年に慶應義塾に入学しますが、中退してサンフランシスコへひとり旅立ちました。生活費を稼ぐために日本字新聞の編集や配達も経験しました。

明治28年に北米の大詩人ミラーと出会い、英詩作を始めます。明治29年に詩集『Seen and Unseen』を刊行します。日本人特有の情緒と幻想性を持つ詩は高い評価を受けました。明治35年には英国に渡り、翌年『From the Eastern Sea』を出版します。優美な情緒にあふれた詩は欧米で絶賛されます。日露戦争を機に帰国し、浮世絵などの日本美術、能・歌舞伎などの伝統文化を英米の文学誌に寄稿し、日本文化を世界に紹介します。慶應義塾大学では40年間も教鞭をとりました。昭和19年(1944)には『芸術殿』で日本芸術院賞を受けました。天王川公園中之島に銅像が建てられています。



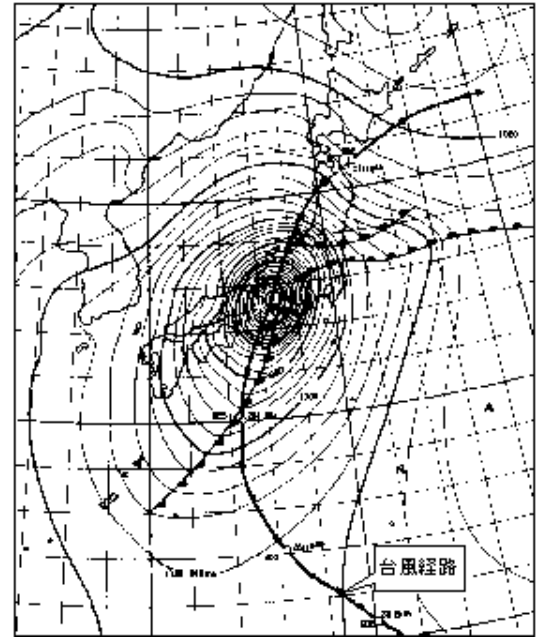
津島出身 反骨の詩人 金子光晴 (1895-1975)

日光橋西袂の「米林」を営む大鹿家に生まれますが、家庭の貧窮により名古屋に移り、金子荘太郎の養子となり、養父の転勤に伴い、京都、東京に住みます。19才の光晴は早稲田、東京美術学校、慶應義塾と入退学を繰り返します。大正7年(1918)詩集『赤土の家』を自費出版します。大正8年に渡欧し、帰国後の大正12年(1923)に詩集『こがね蟲』(新潮社)を刊行。結婚後、ヨーロッパ放浪の旅にでますが、どん底の生活を送ります。帰国後の昭和12年(1937)に詩集『鮫』を刊行します。戦後昭和21年(1946)から、光晴は戦時中に書き溜めた詩を数多く発表します。詩は反戦、反権力、人間探求、家族、女など多岐にわたり、詩の他にも文学史に燦然と輝く紀行文を残しています。著書は詩集『人間の悲劇』、『非情』、自伝『詩人』、『金子光晴全集』(全15巻)、詩集『人間の悲劇』など多数。



昭和34年(1959) 伊勢湾台風

「伊勢湾台風」は愛知県には9月26日21時頃に最も接近し、27日0時過ぎに富山から日本海へ抜けました。伊勢湾周辺では最大風速が40m/秒の暴風となり、記録的な高潮(名古屋港では21時35分に3.45m)も起こりました。愛知・岐阜・三重で死者・行方不明者4,645人(愛知県3,168人)の大惨事をもたらしました。高潮・暴風・大雨により、大きな被害を受けたのは名古屋市南部と西部、海部郡、三重の木曾三川河口部付近でした。海岸や河川の堤防が決壊し、入植が開始された鍋田干拓地を含む全域が水没するなど弥富町では322名と多くの犠牲者を出しました。



津島神社



中世以来、津島社は津島牛頭天王社・津島天王社と称し、牛頭天王を祭祀していました。津島御師と称される神職が、主に東国を巡廻し天王信仰を布教しました。明治元年(1868)神仏分離令により、仏教に関わる諸々が境内から一掃され、翌2年に津島神社と改称。祭神は建速須佐之男命で大穴牟遲命を配祀しました。

本殿



楼門



本殿は慶長10年(1605)に徳川家康の四男松平忠吉の病氣平癒祈願のため妻の政子が寄進造替しました。国指定重要文化財。三間社流造、屋根は桧皮葺。
楼門は天正20年(1592)に豊臣秀吉が寄進建造しました。三間一戸楼門、屋根は入母屋造・檜皮葺。国指定重要文化財。

居森社



居森社は、南大鳥居近くの西にあり、本殿は一間社流造、銅板葺で、県指定文化財。居森社は素戔鳴尊幸御魂を祀り中央にあり、末社疹社は素戔鳴尊和御魂を祀って向って右にあり、末社大日靈社は大日靈命(天照大神)を祀って向って左にあります。社伝は津島神社の元宮としています。

御神木とは、神の降臨に当たっての標識であり、神の依代。馬場町にある大銀杏がご神木で樹齢500年、境内東鳥居の南にあるのは樹齢600年で県天然記念物です。



ご神木(馬場町)
かつて御輿宿りがあった。



神官・国学者 真野時綱

真野太郎太夫時綱（慶安元～享保2年（1648～1717））は通称縫殿之介。晩年に蔵六翁、藤浪翁などと号す。心廓了堂居士は法名。津島神社の神官家太郎太夫家に生まれ、若くして向学の志篤く、18歳で京都に遊学。久我雅通、卜部兼魚等に師事しました。35歳で家業を継いだ後も京都へ行き来し、勉学を続けました。真野時綱は藩命により吉見幸和、天野信景、深田明峯らとともに『尾張風土記』の撰述に当たりました。著書に『古今神学類編』（102巻）『藤波私記』『正徳注進記』『大祭勘例帳』『津島踊記』などがあります。



真野時綱の墓
(延命寺)

神主・歌人 氷室豊長(長翁)

氷室豊長(天明4～文久3年(1784～1863))は尾張藩士松井氏の二男として生まれ、文化4年(1807)津島牛頭天王社神主氷室種長の養嗣子となり、文化6年に神主職を継ぎました。長翁は在職中、本殿の釣殿・祭文殿、廻廊を再建し社殿の整備に尽力しました。歌道では香川景樹の門に入り、椿園・長翁などと号しました。尾張桂園派の中心人物となり、桂園社中の大会も度々催されました。著書に『桂花余香』『芳野日記』がある。津島牛頭天王社の神主氷室家の菩提寺である常楽寺(曹洞宗)には、代々の氷室神主の墓群が寺内にあり、豊長の墓もあります。

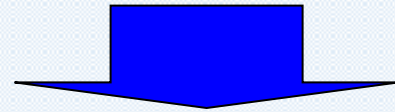


氷室豊長の墓
(常楽寺:津島市
天王通り5)

明治の神仏分離

■慶応4・明治元年(1868)

「**神仏分離令**」(**神仏判然令**)、明治政府は古代以来の神仏習合を禁じた命令を出す。全国に**廃仏毀釈**(はいぶつきしやく)運動が起きました。



■神仏分離令は、**社家(神職)・社僧の苦難**の始まりでした。

神職の世襲廃止・神札頒布禁止・社領の廃止。社僧の還俗

■**宝寿院は還俗せず、境内の神宮寺の薬師如来像などを引き継ぐ。実相院・明星院は還俗し、神官となる。当時の観音坊は無住。**

■**明治2年(1869)に津島牛頭天王社から津島神社と改称しました。津島の固有文化でもあった天王信仰は衰退。**

大橋秋二

陶芸家大橋秋二のお墓が瑞泉寺にあります。大橋秋二は、寛政7年(1795)に製薬商の家に生まれ、大橋家の養子となった後、茶道は久田流、画は小島老鉄に師事しました。37、8才頃より陶芸に没頭するようになり、京都の尾形周平に陶法を学び、京焼や染付を製作、長崎まで遊学しました。唐津・青磁・安南の焼き物を研究し、瀬戸や志野など様々な焼き物を取り入れ、釉薬、陶土も考案し気品と風雅にあふれた陶器は「秋二焼」として重宝されました。



菊形水指
瀬戸染付
高さ19.5cm
口径16cm

津島の祭文化

尾張津島天王祭

尾張津島天王祭は陰暦6月14日に宵祭、15日に朝祭が行われていました。現在は7月第4土曜日と翌日曜日。

宵祭



宵祭には津島五車の巻藁舟が数多の提灯を灯し、天王川に出ます。「尾張津島天王祭の車楽舟行事」は昭和55年(1980)に国指定重要無形民俗文化財に、平成28年(2016)にユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」に登録されました。

朝 祭

朝祭では津島の車楽舟5艘(米之座・堤下・筏場・今市場・下構)と市江(いちえ)の車楽舟1艘(市江車)、あわせて6艘が出ます。市江は津島牛頭天王社から佐屋川下流4kmほど南に位置し、西保村、東保村、西条村、東条村、荷ノ上(にのうえ)村、五ノ三村、鯛浦(うぐいら)村の総称です。市江の車楽舟が車河戸を出船し、次いで津島の車楽舟5艘(津島五車)が当番車を先頭に順次、出船します。



市江の車楽舟の特質

①市江の車楽舟は**先車(さきぐるま)**と定められ、朝祭で必ず津島の車楽舟5艘の先に進みます。

②市江の車楽舟には**鉾持(ほこもち)10人**が乗り、津島神社に鉾10本を奉獻します。

③市江の車楽舟の**屋台屋根は唐破風屋根(からはふやね)**です。津島の車楽舟5艘は入母屋造(いりもやづくり)です。

④屋形の最前方には「**神君様御寄附物**」の立て札があり、桐箱が置かれます。桐箱の中には、**徳川家康から寄進された金襴の着物**が入っています。



車屋 (くるまや)

市江(1艘)と津島五ヶ村(5艘)が、車楽舟(車)6艘を出します。この6地区の祭の主宰者、祭総代(まつりそうだい)を「車屋」と呼びます。江戸時代には肝煎(きもいり)とも呼ばれていました。

祭に際して、車屋は袴(かみしも)を着し、車楽舟の前部の床几(しょうぎ)に腰掛けます。江戸時代の車屋は、祭期間中には苗字帯刀(みょうじたいとう)を許されており、武士身分とみなされました。市江の車屋は宇佐美家、服部家が世襲しました。津島五ヶ村では庄屋格の有力者が車屋になりました。



朝祭の車楽舟 置物(能人形)

置物とは朝祭の車楽舟の最上部に飾られる能人形です。車楽舟1艘に人形は2体置かれます。能番組のシテ(主役)とワキ(脇役)です。この能人形は籤(くじ)で決められます。ただし、津島の当番車(先頭)は「高砂」とさだめられています。市江の置物は、26番組の中から、籤(くじ)で決められます。



尾張藩から「三通物」米・舟・竹の寄進

- **米**の寄進

 - 津島：50石（現物）

 - 車田**（年貢免除地）

 - 14町4反余（152石余）

- **舟**20艘は名古屋・熱田・蟹江などから調進
（合計20艘⇒車楽舟5艘・大山舟5艘）

- **竹**は、斎竹20本は美濃の兼山・長良から

 - 提灯竹500本は西川端・草平・淵高などから

 - 船竿80本は美濃の兼山から

※市江にも米（車田）・舟・竹の寄進があった。

浮世絵・屏風、古典芸能「狂言」と尾張津島天王祭

江戸時代の華麗な尾張津島天王祭を描いた絵画は、屏風・絵巻・版画・団扇絵など多岐にわたっています。版画では初代歌川広重が描いた『六十余州名所図会』の「尾張津嶋天王祭り」（宵祭図）、2代目広重の朝祭図が広く知られています。大英博物館などに所蔵されている屏風は金雲極彩色で描かれ、精緻さと華麗さは観るものを驚かせます。



狂言の演目に「千鳥（ちどり）」があります。これには「津島祭」の話が出てきます。

開扉祭の大松明行事

陰暦2月1日に行われる開扉祭は「おみと」とも呼ばれます。開扉祭の大松明行事は火祭(ひまつり)ともいえます。事前に、開扉祭の大松明(おおたいまつ)が製作されます。大松明は大量の葎を束ねて長さ10m、太さ1mです。重さは1000kgほどで、日本最大級です。2本の大松明は東境内を練り廻り、大松明が燃えさかると一気に楼門をくぐり拝殿前に奉獻されます。2本の大松明の間を神職は拝殿から本殿に進み、祭事を行います。



津島秋まつり 山車祭

市神社祭礼「七切祭」の始まり

『張州雑志』卷第七五「津嶋町中堂社年中行事」

八月十五日祭礼あり。車七輛練物等あり。米之座・於之座・池之堂・麩屋町・布屋町・北口・高屋敷(的場町の練物、此の町に加わる)。

此の神事は正徳元年卯(1711)八月十五日夜、笹に堤燈を付け、傘鉾等を出し、是を始めとす。凶年には湯立神楽を奉る迄也。享保二年迄是に同じ。享保三年(1718)より車を飾る。正敷祭礼に定まりたるは享保十一年(1726)也。車の人形練物等は年々定まらず。



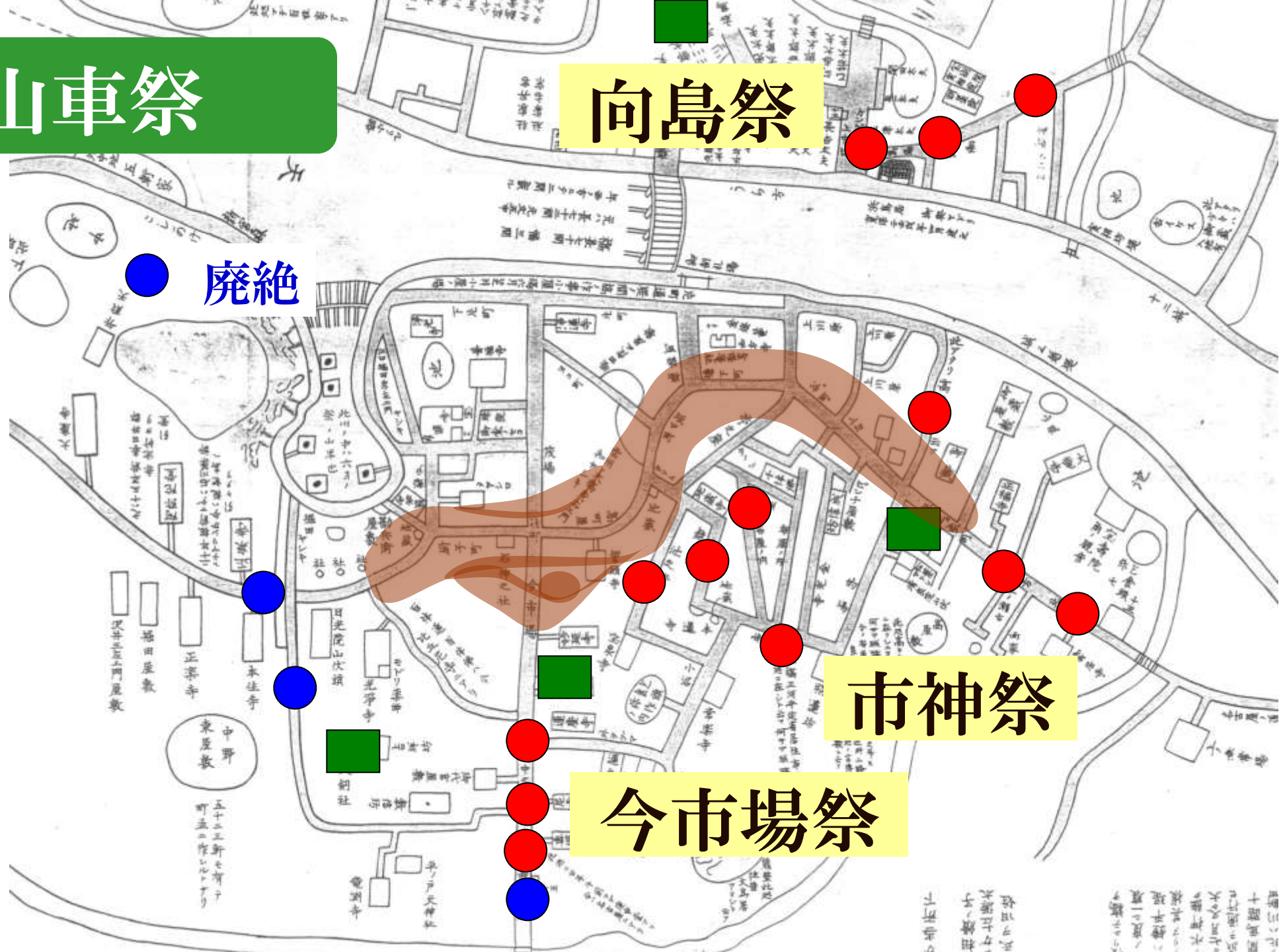
山車祭

向島祭

廃絶

市神祭

今市場祭



七切祭



今市場祭



向島祭



七切の小之座、今市場の大中切は休止中

津島神社は大正15年(1926)10月1日に国幣小社に列格した。この年12月25日、昭和に改元された。

翌昭和2年(1927)8月22日に津島神社に関係者、惣代らが参集決議事項

- ・津島神社国幣小社に列格記念祭を10月1日に挙行
- ・山車奉納は列格記念の10月1日一斉に挙行の事

七切(祭日陰暦8月15日)、今市場(祭日陰暦8月2日)、向島(祭日陰暦8月1日)そして石採祭(祭日8月15日)の祭日が10月1日に統一された。



津島秋まつりの創始

神守祭の山車 憶感神社・穂歳神社

山車前方には、基壇の勾欄には桜花をつけた立ち柳が飾られ、中段勾欄の両隅には枝垂れ柳の枝に桜の飾り花を2,500枚つけて、前面の左右に垂らしています。

神守山車の四本柱
内には大将人形が
置かれています。
関羽(上町山車)
林和靖(中町山車)
寿老人(南町山車)

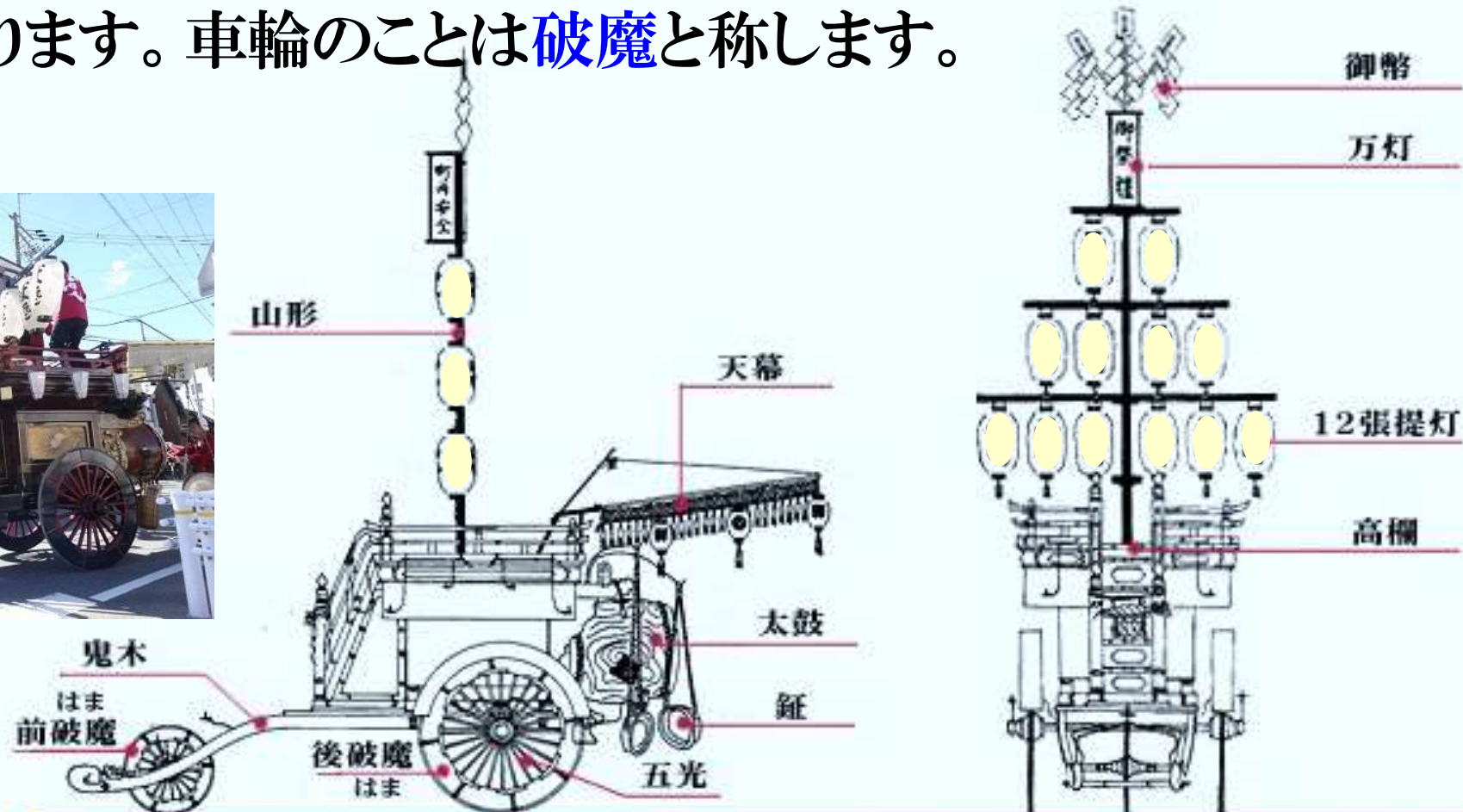


石採祭

明天町の秋葉神社の石採祭は、大正4年(1915)大正天皇御大典に南部が弥富より借りた祭車で行ったのが始まりです。翌5年に南部と北部が祭車を購入しました。その翌年に中部が桑名今片町から祭車を購入し、3輦が揃いました。津島市唐臼町の唐臼神社の石採祭車1輦は、昭和31年(1956)に始まりました。



石採祭車は3輪（前1輪、後2輪）の御所車形式で、車輪を繋ぐ轆（ながえ）の後方上部に四本柱で構成する枡台を載せ、枡台前方に階段を設け、枡台上部に山形十二張の提燈柱を立て、その上部に万燈（行燈）を付けます。枡台後方に鉦・太鼓の楽器を据え、その楽器の保護に天幕を設けた独特の山車構造です。轆（ながえ）のことを鬼木（おにぎ）と称し、前方を絞って下に曲げてあります。車輪のことは破魔と称します。



神楽 (かぐら)

中近世の「獅子舞」は豊作、子孫繁栄、邪気祓いを意味する神事芸能で、獅子を中心として行われていました。獅子の頭は常に神聖に扱われ、箱や小さな社殿に大切に保管されていました。



江戸時代に、尾張西南部では獅子の頭を収める箱に装飾を施すことが流行します。四本の柱を立て屋根を乗せ、屋根には竜や唐獅子、合戦の模様を表現した武者や城などの彫物が飾りたてられました。金箔貼りする村もあらわれ、次第に華麗さを競い合うようになりました。江戸時代末期には、神楽屋形を所有することが村の格になっていきます。津島市には21基の神楽があります。

津島の古寺社

大龍寺 (津島市北町113)

亀伯山大龍寺(だいにりゅうじ)は浄土宗西山禅林寺派に属しています。『浪合記』には「永享8年(1436)6月15日、津島十一党の者、社を建てて祭る。天王の境内若宮社是なる」と記されており、現在も津島神社境内の若宮社祭神は尹良親王です。後醍醐天皇(ごだいごてんのう)の御孫尹良親王の菩提寺大龍寺と曾孫良王君の菩提寺瑞泉寺ともに、江戸時代の宗派は同じで浄土宗西山派で禅林寺と光明寺の両末でした。

南北朝時代(1336～1392)とは、後醍醐天皇による「建武の新政」が崩壊した後、足利尊氏が擁立した光明天皇(北朝方)に対抗して、後醍醐天皇(南朝方)が吉野を拠点として、それぞれが正統性を主張し戦った時代です。



成信坊 (津島市本町1-41)



市指定文化財の「木喰明満(もくじきみょうまん)作木造薬師如来坐像」が所蔵されています。木喰仏特有の微笑が心を癒してくれます。

久遠山成信坊(じょうしんぼう)の宗派は、真宗大谷派です。往古は天台宗でしたが、慶専が本願寺5世綽如に帰依し、浄土真宗に改宗。教如に忠勤を励んだ成信坊の山門には「津島之坊」と刻された扁額が掛けられ、「御坊」並の寺であること表しています。本堂の前には石臼(ひき臼)が敷き詰められています

興禅寺 (津島市今市場町3-22)



興禅寺は津島牛頭天王社の筆頭神官堀田右馬大夫家の菩提寺。

宝珠山興禅寺(こうぜんじ)の宗派は曹洞宗で、大本山は總持寺(横浜市鶴見区)です。本尊は薬師如来坐像です。興禅寺は応永3年(1396)に万山喜一が創建しました。天正13年(1586年1月)の大地震により諸堂が倒壊したため、今市場に再建しました。「海東古禅林(かいとうこぜんりん)」の扁額が山門に掛けられているように、海部地方有数の曹洞宗寺院で多くの末寺がありました。

妙延寺 (津島市今市場町1-11)



津嶋山**妙延寺**(みょうえんじ)の宗派は**日蓮宗**で、本山は身延山久遠寺(みのぶさんくおんじ)です。妙延寺は、熱心な日蓮宗信者であった**加藤清正**(かとうきよまさ)**ゆかりの寺院**として全国的に有名です。清正ゆかりの品「手形」などがあります。加藤清正が母とともに上河原に寄宿していたとき、妙延寺に通っていました。当時の妙延寺は寺子屋(手跡指南)も行っており、「**清正公草紙掛松**」と称された松の木がありました。

地蔵堂 (津島市天王通り3丁目)

円空の千体仏は、21cmの地蔵菩薩坐像を中心として、5cm程の1,008体の小さな仏像が岩壁のように作られた光背にぎっしりと並びつけられ、1体の仏像のようです。仏像には地蔵像・稲荷像などもあり、仏像の表情がすべて異なります。

厨子には善財童子(ぜんざいどうじ)、護法神(ごほうしん)、韋駄天(いだてん)の3像も納められています。

千体仏は延宝期(1673~1681)の作品で、円空の千体仏が完全な形で残っているのは津島だけです。この地蔵堂の厨子が開帳されるのは地蔵盆(陰暦7月24日)です。



蓮台寺 (津島市弥生町6)

九品山蓮台寺(れんたいじ)の宗派は浄土宗で、本山は蓮華寺(滋賀県米原市番場)です。一向俊聖の最後の直弟子弥阿(みあ 1318年寂)が、13世紀末期の弘安から文保期に開基したと考えられます。

弥阿上人坐像と一向上人坐像は、ともに県指定文化財です。弥阿上人坐像は、寄木造で玉眼(ぎょくがん)、着彩の木像です。弥阿上人は文保2年(1318)に寂した当寺の住職で、その30回忌に当たる貞和3年(1347)に、造立したものと考えられます。赤門と呼ばれる山門は、赤目村の横井家の武家屋敷門を明治初期に移設しました。



円成寺 えんじょうじ

圓成律寺

冥通上人三十

三四代

法隆寺

納言持豊

法隆寺

んと

玉らけ

ひ

とぬす

の河や

うま

其奉

言ふまに

寮

わらわ

みま

わ



『海東唱歌』

60 此より探る蟹江路 神島田なる中一色

円成律寺の名刹は 大曼茶羅と世に知らる

関通上人 (1696~1770)

元禄9年(一六九六) 大成村に生まれる。

5・6歳で出塵の志

小茂井村専徳寺 呉峰に学ぶ

西方寺照誉上人(霊徹和尚)に入門

宝永5年(一七〇八) 得度し、元教と号す

宝永8年 上京

正徳2年(一七二二) 増上寺祐天大僧正 五重

享保元年(一七一六) 詮察大僧正 宗戒両脈相承

享保8年 帰国途中 関通と号す。

西国巡遊

享保10年 伊勢長島 光岸寺

伊勢山田越坂 惣通寺

享保12年 西方寺

享保20年 西方寺を円成律寺にする。

(一七三五) 三州崇福寺の義燈比丘を請来

以降は居を定めず、京都・江戸・九州

同門の偏嫉、他宗の迫害、国廳への讒訴あり。

創建並に改修の精舎拾有余、

得度の僧尼千五百餘人。受戒の道俗三千餘

明和7年 京都転法輪寺にて寂

木造阿弥陀如来坐像

像高約5m



説法印の美しい阿弥陀如来坐像。江戸時代中期の作、台座、光背も破損なし。名古屋の加藤伊兵衛は、関通上人に深く帰依し、上人の指導を受けて仏師に依頼。丈六阿弥陀仏を享保20年(1735)に寄進。入仏式当日は一村200余戸の人々こぞって参列しました。関通上人開山の貞寿寺にも像容のよく似た阿弥陀像が安置されています。

浄光寺 (津島市片町2)

日月山浄光寺は真宗大谷派です。慶長11年(1606)に教念(きょうねん)が草庵(念仏道場)を結び、貞享元年(1684)2世信教(しんきょう)のとき浄光寺と号しました。

市指定文化財の「明治天皇佐屋行在所(さやあんざいしょ)」は貴重な建造物です。御座の間は、厳かで気高さが感じられる部屋です。弘化2年(1845)の建築で、尾張藩から下賜されたものでした。その後、所有者は転々となりましたが、昭和2年(1927)3月に浄光寺に移築されました。



終

制作 信長の台所歴史検定「津島の達人」実行委員会
監修 黒田剛司（天王文化塾）